

4 島村抱月のワイルド紹介

文芸協会解散と共に、芸術座を創設し、演劇人として注目を浴びた島村抱月（瀧太郎）（1871 -1918）については「第2章 大正時代」で取り上げることにし、ここでは明治時代の島村抱月を唯美主義の観点からいち早くワイルドを紹介した美学者としての一面を取り上げたい。

(1) 島村抱月

島村抱月は明治4年（1871）に島根県に父・佐々山一平、母・チセの長男として生まれた。名は瀧太郎。明治23年（1890）2月に上京し、東京物理学校、日本英学校、私立商業学校等で、英語、数学、理科等を学び、郷里の先輩である森鷗外（1862 -1922）を訪ねて、進学の相談をしたこともある。明治24年（1891）6月に島村県那賀濱田町裁判所検事島村文耕の養子となり、島村と改姓。同年10月に東京専門学校文学科に入学した。この年に『早稲田文学』が創刊され、さらに坪内逍遙（1859 -1935）と森鷗外の間に没理想論争が起きていた。抱月は、逍遙と大西祝（1864 -1900）との影響を強く受けたと言われている。明治27年（1894）7月に東京専門学校文学科を卒業。卒業論文「覚の性質を概論して美覚の要状に及ぶ」は、「審美的意識の性質を論ず」として改題されて『早稲田文学』（9月～12月）に発表された。

ここで、明治24年（1891）の東京専門学校の状況を見てみると、「島村抱月と美学」、あるいは「島村抱月とワイルド」との接点を知る手掛かりとなる。まず、増田藤之助が「The Soul of Man under socialism」を抄訳したのが明治24年（1891）のことであった。同じ明治24年には大西祝（1864 -1900）が論理、心理、美学、西洋哲学史の講義を担当、翌年には小屋（大塚）保治（1868 -1931）も美学を担当した。抱月には日本の美学の先駆者である大西祝や大塚保治などの講義を受ける機会があった。抱月の美学への関心については、昭和55年（1980）の佐渡谷重信『抱月島村瀧太郎論』（明治書院）がよい参考となる。抱月が坪内逍遙や金子筑水と共に『早稲田文学』の創刊に尽力したのも明治24年（1891）10月のことであった。

明治31年（1898）9月より東京専門学校文科講師となり、1年に美辞学、2年に支那文学史、3年に西洋美学史を講じた。抱月は明治35年（1902）3月にはイギリス、ドイツに留学。5月7日にロンドン到着。10月よりオックスフォード大学で聴講を開始した。明治37年（1904）7月にドイツに渡り、10月よりベルリン大学で聴講を開始した。明治38年（1905）6月にベルリンを離れ、フランス、イタリア、イギリスを経て、9月12日に帰国した。10月より早稲田大学文学科講師となり、美学、近代英文学史、欧洲近代文藝史、文学概論等を講じた。留学中の抱月については平成10年（1998）の岩佐壮四郎『抱月のベル・エポック』（大修館書店）がよい参考となる。帰国後に早稲田大学教授となり、明治39年（1906）に『早稲田文学』を再刊した。再刊（第2次）の第1号には「囚われた文芸」を寄稿し、ワイルドへの言及はない

もののラファエル前派などへの言及がある。

(2) 「英国の尚美主義」

抱月は明治 39 年(1906)に芸苑社講演会で「英国の尚美主義」と題した講演を行い、その内容を明治 40 年(1907)に『明星』(末歳第 9 号)で発表した。さらに、その講演は明治 42 年(1909 年)の『近代文藝之研究』(早稲田大学出版部)に収録された。

是れから述べますのは英国尚美主義の話であります、尚美主義はまた唯美主義、審美主義とも訳しまして、英語のイーッセチシズム Aestheticism がそれです。

(1)

抱月は尚美主義の起源をウォルター・ハミルトン (Walter Hamilton, 1844 -1899) とノルダウを土台にして、尚美主義を世紀末フランスのデカダンスからではなく、ラファエル前派に淵源する流れとして説明した。参考にしたのはハミルトンの *The Aestheticism Movement in England* (1882) とノルダウの *Degeneration* (1892 -1893: 英訳, 1895) が中心である。

さて此主義が如何にして起つたかと云ふ話に戻りますと 断って置きますが、之は英吉利のウォルター、ハミルトンと云ふ人の書いた書物を土臺にし、他の書物を参考として調べたのです 此派の運動はノルドオの説によると夫の佛蘭西のボドレア、今から丁度四十年許り前に死んだ詩人が本であつたらしい。(2)

The Aestheticism Movement in England について少し紹介しておきたい。同書の “ Contents ” は以下の通りである。

The Pre-Raphaelites

The Germ

John Ruskin

The Grosvenor Gallery

Aesthetic Culture

Poets of the Aethetic Schoool

William Michael Rossetti

Arthur W. E. O' Shaugenessy

Thomas Moolner

William Morris

Algernon Charles Swinburne

Dante Gabriel Rossetti
Joas Fisher: A Poem in Brown and White, and Mr. Robert Buchanan
Punch's Attacks on the Aesthetes
Mr. Oscar Wilde
The Home of the Aesthetes
Conclusion

さて、この中で“ The Pre-Raphaelites ”と“ Mr. Oscar Wilde ”に注目しておきたい。“ The Pre-Raphaelites ”の冒頭は以下の通りである。

In the year 1848 there were studying together in the art school of the Royal Academy, four every young men, namely, Holman Hunt, John Everett Millais, Dante Gabriel Rossetti, and Thomas Woolner, the first three being painters, the last a sculptor. Endowed with great originality of genius, combined with remarkable industry, they formed amongst themselves the daring project of introducing a revolution into the arts of painting and sculpture, as then practiced in England.

But 1848 was fertile in England. (3)

続いて“ Mr. Oscar Wilde ”の冒頭と最後のパラグラフを紹介しておきたい。

It is seldom, indeed, that so very young a man as Mr. Oscar Wilde comes so prominently into public notice, and it would be neither truthful nor complimentary to ascribe the notoriety he has obtained entirely to his own exertions. The ridicule that has been lavished on his actions and dress is as unreasonable, as the excessive adulation which his poems have earned from some of the intense AEsthetes, who look upon him as the exponent of their most extreme ideas. (4)

Botticelli and E. Burne-Jones, Oxford and Japan, *Romeo and Juliet* at the Lyceum Theatre and *Patience* at the Savoy, Wagner and Sullivan, Swinburne and Oscar Wilde; how widely asunder do these all sound, how dissimilar their attributes, yet each and all in a manner aggregate to form the AEesthetic school, and have helped it to the poisiton it holds at present, hight in the estimation of all true lovers of the ideal, the passionate, and the beautiful. (5)

ハミルトンは本書の中でオスカー・ワイルドの生まれと育ちを紹介したあと、“Ravenna”をはじめ、“La Belle Marguerite”など、ワイルドの詩作を中心に引き上げ、その後はアメリカ講演旅行を引き上げている。*The Aestheticism Movement in England*が出版されたのが明治15年(1882)であるから、*The Decay of Lying*(1891)発表以前のことである。*The Decay of Lying*は最初、*Nineteen Century*(25)に掲載されたのが明治22年(1889)であるから、ハミルトンの*The Aestheticism Movement in England*には当然引き上げられていないのである。ノルダウの*Degeneration*は明治25-26年(1892-1893)に出版されたものであるから、ハミルトンのあと10年間にワイルドの作品が反映されるべきであるが、果たしてどうであろうか?(ノルダウについては、今後の「書誌から見た日本ワイルド受容研究(大正編)」で述べることにする)ここでワイルドのおもな作品を1892年まで時系列で示してみたい。

1875 Nov. “Chorus of Cloud-Maidens” in *Dublin University Magazine*.
 1877 July “The Grosvenor Gallery” in *Dublin University Magazine*.
 1878 June *Ravenna*.
 1881 June *Poems*.

1881 24 Dec. Sails for New York.
 1882 Jan.-Oct. Lectures in the USA and Canada.
 1882 27 Dec. Sails from New York to England.
 1883 Jan.-May In Paris.
 1883 mid-May Returns to London.
 1883 2 Aug. Sails for New York.

1883 20 Aug. *Vera; or, The Nihilists* opened and closed in a week.

1883 11 Sep. Sails for England.

1888 May *The Happy Prince and Other Tales*.
 1890 20 June *The Picture of Dorian Gray* in *Lippincotts Monthly Magazine*.
 1891 26 Jan. *The Duchess of Padua*, under the title of *Guido Ferranti*, is produced in New York and closes in Three weeks.
 1891 ? 24 Apr. *The Picture of Dorian Gray* (revised and expanded)

- published in book form.
- 1891 2 May *Intentions* (containing “The Decay of Lying,” “Pen, Pencil and Poison,” “The Critic as Artist,” and “The Truth of Masks”) published.
- 1891 July *Lord Arthur Savile’s Crime and Other Stories* published.
- 1891 Nov. *A House of Pomegranates* published.
- 1892 20 Feb. *Lady Windermere’s Fan* opens at the St. James’s Theatre.
- 1892 26 May “Author’s Edition” of *Poems* published (identical with the 1882 rev. edition of the 1881 publication).
- 1892 June *Salomé* denied a license by Lord Chamberlain for public Performance/
- 1892 July *Lady Windermere’s Fan* ends its run in London.^(6)

さらに、英国の尚美主義については以下のように説明している。

英國の尚美主義と云ふものが果たして直接に佛蘭西から来たのであるかどうかは暫く別として、是れが一方英國の夫のラファエル前派運動といふものを父として生まれて来たものであることは明らかである。即ちラファエル前派の續きが尚美主義である。系統は左様であるが、主義其者はと云へば大に變つてゐることも認めねばなりません。^(7)

尚美主義の人としてウィリアム・モリス(William Morris, 1834 -1896)、スウィンバーン(Algernon Charles Synburne, 1837 -1909)それにオスカ・ワイルドを取り上げ、ワイルドについては「尚美主義に於ける立場はむしろ実行者」^(8)あることとワイルドの尚美主義の定義が紹介された。

オスカー、ワイルドの尚美主義に下した定義といふものを見るに、第一、芸術は芸術みづからを目的とする。随って第二には芸術は人生、自然、思想などいふものに頼ることなし。悪芸術は此等を目的とする所に生ずる。總べて此等のものは一旦芸術の型に入れて始めて妙がある。

第三に較もすれば人は芸術が人生を模すると云ふが倒様である、人生が却て芸術を模するものである。^(9)

この定義は *The Decay of Lying* に示されたワイルドの芸術観を紹介したものである。*The Decay of Lying* には次のような表現がある。

Art never expresses anything but itself. It has an independent life, just as Thought has, and develops purely on its own lines.⁽¹⁰⁾

All bad art comes from returning to Life and Nature, and elevating them into ideals.⁽¹¹⁾

Life imitates Art far more than Art imitates Life.⁽¹²⁾

抱月は「随分と思ひ切った當時一般の風俗に対する反抗主義であつたのです」⁽¹³⁾とワイルドの当時の受け入れ方について触れている。さらに「斯様な主張を以て居ることが世間一般から極端な邪論として罵られる傾向を以てゐる」⁽¹⁴⁾とし、ワイルドの衣服へと話題が移って行くことになる。その結論部分では、抱月は結論的批評を述べるとし、次のように述べている。

尚美主義といふものの中には、凡そ三點の注意すべき箇條がある。即ち第一は、ビュカナンの所謂肉感的といふこと、第二は藝術は藝術みづからの為と稱して思想道德の凡てから獨立しやうとすること、第三は情緒の強いのを主として自己といふものを餘りに明かに掲げ出さんとすること⁽¹⁵⁾

抱月はさらに、尚美主義やラファエル前派と対立していたロバート・ビュカナン (Robert Buchanan, 1841 -1901) やオペラ『ペイシェンス』 (*Patience*, 1881) などについても言及している。この講演でワイルドの芸術観を *The Decay of Lying* を中心に紹介したことはデカダン論に偏っていたこれまでの紹介とは大きく違うものである。さらに、「第三の自己の登場といふこと、是れにこそ重要な意味がある」⁽¹⁶⁾としている。

自己を代表するには情緒の熱烈なる発動の外途がなかった。所がそれもやはり例の極端に行つて、情緒の熱烈は誇張となり奇矯となり遂にオスカー、ワイルドの如き人を出して一挙一動みな自己の廣告と見られるやうな事をする、ノルドオの所謂自己狂となり了つたのであります。⁽¹⁷⁾

抱月は自己主観を優先する見解と写实的自然派の見解については、「主客両体の融合を見出すといふ如き道を求める」⁽¹⁸⁾と述べているが、この講演では述べ尽くせないとして、明言を避けている。また、講演中に *The Decay of Lying* については全く触れていないことも付け加えておきたい。

(3) 日本の美学史とワイルドの紹介

島村抱月の美学への関心は明治 24 年(1891)10 月に東京専門学校に入学して以降のことで、坪内逍遙と森鷗外の没理想論争や大西祝による影響があったようだ。当時の日本の美学研究の様子を見てみると、明治 22 年(1889)にフェノロサ(Ernest Francisco Fenollosa, 1853-1908)が東京美術学校で美学・美術史の講義を始めている。明治 24 年(1891)には逍遙・鷗外の没理想論争によってハルトマン(Eduard von Hartmann, 1842-1906)を武器にした鷗外の審美学(美学)が知られるようになった。抱月は明治 27 年(1894)に東京専門学校文学科を卒業、その後は東京専門学校文科講師となり、留学直前に『新美辞学』を発表したのである。

日本の美学史について簡単に触れておきたい。まず、「世界で最初に独立した美学の講座が開設されたのは日本においてである」⁽¹⁹⁾という。これは美学が哲学の講義の一環として講じられてきた西洋とは違い、日本では美学が独立した学問分野として早くから位置付けられていたのである。日本での美学の始まりは、明治 12 年(1879)の『修辞及華文』(文部省)、明治 16 年(1883)から翌年にかけて上下二冊の形で出版された『維氏美学』(文部編輯局)の二冊を取り上げておきたい。『修辞及華文』は百科全書の一冊として刊行され、菊池大麓(1855-1917)によって訳されたものである。『維氏美学』はフランスのユージェンヌ・ウェロン(Véron Eugène, 1825-1889)の『美学』(L'esthétique, 1878)を中江兆民(1847-1901)が訳したものである。「美学」の名称の起こりは本書からと言われている。しかし、何故、文部省が本書を選んで翻訳させたのかは疑問が残るところであり、森鷗外によれば、美術や文学に影響を与えなかったと述べているのである。⁽²⁰⁾

明治初期の美学あるいは美術といった所謂“art”をどうとらえるかが西洋文化をどうとらえるかにも繋がると考えられよう。美学の流れのほかにも「美術」という用語についても注目しておきたい。明治 5 年(1872)の西周(1829-1897)による『美妙学説』(御進講)、明治 15 年(1882)のフェノロサ『美術眞説』(大森惟中筆記)、同年には東京大学に審美学の科目の設置などの動きがあった。

抱月は日本で最初に本格的にワイルドを紹介した美学者であると言っても過言ではないだろう。日本の美学受容史については昭和 61 年(1981)の Doi Yoshio の“Bruno Taut in Japan” (*Aesthetics*. 2. The Japanese Society For Aesthetics)、平成 2 年(1990)の Kaneda Tamio の“NAKAGAWA Jurei und die japanische Ästhetik um die jahrhundertmende” (*Aesthetics*. 4. The Japanese Society For Aesthetics)、平成 2 年(1990)の浅岡潔『美学史研究序説』(やしま書房)、平成 12 年(2000)の浜下昌宏「実学としての美学 - 西周による西洋美学受容」、太田喬夫「大西克礼と講壇美学の特色」(神林恒道編『日本の芸術論 - 伝統と近代』ミネルヴァ書房)などがよい参考となる。また、大正 8 年(1919)の『抱月全集』(天佑社)は、昭和 54 年(1979)に日本図書センタ - より復刻されている。日本の美学の先駆者で

あり、抱月に多大な影響を与えた大西祝については明治 37 年(1904)の大西祝『大西博士全集』(第 7 巻、警醒書店：日本図書センターより復刻，1982)がよい参考となる。美学者島村抱月の影響は、彼の教え子である本間久雄に見ることができよう。後に詳しく解説することになるが、本間久雄が明治 42 年(1909)に発表した「人生も自然も芸術の模倣也」でもワイルドの芸術観を *The Decay of Lying* から紹介したのである。

参考資料

大西祝『大西博士全集』(第 7 巻、警醒書店、1904 年)

『抱月全集』(天佑社、1919 年)

川副國基『島村抱月』(早稲田選書)(早稲田大学出版部、1953 年 4 月)

金田民夫『明治期の美学と芸術思想』(昭和 54 年度科学研究費＜総合研究 A＞研究成果報告書、1979 年)

『抱月全集』(日本図書センター、1979 年 9 月)

佐渡谷重信『抱月島村瀧太郎論』(明治書院、1980 年 10 月)

Doi Yoshio“Bruno Taut in Japan” (*Aesthetics*. 2. The Japanese Society For Aesthetics, 1981)

大西祝『大西博士全集』(第 7 巻、日本図書センター，1982 年)

稲村元監修『近代作家追悼文集成』(第 6 巻、島村抱月 大須賀乙字)(ゆまに書房、1987 年 1 月)

川副國基『島村抱月』(近代作家研究叢書 54)(日本図書センター、1987 年 10 月)

Kaneda Tamio“NAKAGAWA Jurei und die japanische Ästhetik um die Jahrhundertmende” (*Aesthetics*. 4. The Japanese Society For Aesthetics, 1990)

金田民夫『日本近代美学序説』(法律文化社、1990 年 3 月)

浅岡潔『美学史研究序説』(やしま書房、1996 年 3 月)

山田勝編『オスカー・ワイルド事典』(北星堂書店、1997 年 10 月)

岩佐壮四郎『抱月のベル・エポック』(大修館書店、1998 年 5 月)

佐々木隆「明治時代のワイルド受容」(『武蔵野短期大学研究紀要』第 13 輯、武蔵野短期大学、1999 年 6 月)

神林恒道編『日本の芸術論 - 伝統と近代』ミネルヴァ書房、2000 年 4 年

大西祝『大西博士全集(新装版)』(第 7 巻、日本図書センター，2001 年 10 月)

神林恒道『美学事始』(勁草書房、2002 年 9 月)

注

- (1) 島村瀧太郎「英国の尚美主義」(『近代文藝之研究』早稲田大学出版部、1909年6月), p.581. 初出は『明星』(末歳第9号、1907年9月)。
- (2) Ibid., p.583
- (3) Walter Hamilton. *The Aesthetic Movement in England* (London: Reeves & Turner, 1906), p.1.
- (4) Ibid., p.85.
- (5) Ibid., p.110.
- (6) Karl Beckson. *The Oscar Wilde Encyclopedia* (New York: AMS Press, 1998), pp.xv-xvi.
- (7) 「英国の尚美主義」, pp.584-585
- (8) Ibid., p.588.
- (9) Ibid., p.588.
- (10) *The Complete Works of Oscar Wilde*, p.991.
- (11) Ibid, p.991.
- (12) Ibid, p.992
- (13) 「英国の尚美主義」, p.588.
- (14) Ibid., pp.588-589.
- (15) Ibid., p.592.
- (16) Ibid., p.594.
- (17) Ditto.
- (18) Ditto.
- (19) 神林恒道『美学事始』(勁草書房、2002年9月), p.93.
- (20) Ibid., p.94.